ISSN 0913−7181

Center for Urban and Regional Studies
CURES NEWSLETTER 地域経済ニューズレター
金沢大学経済学部 2005. 7 . 31 No.70

特集 子どもと育ちあう地域

子どもが被害者・加害者となる事件の続発に象徴的にみられるように、いま地域社会は、子どもたちにとってよい環境を提供できているとは到底いえない状況である。翻って、子どもや若者の成長・発達を保障せずに地域の再生・活性化はありえない。子どもの視点、子育ての視点から地域の経済、社会、文化を再生させることが、同時に、地域で働き、学び、生活する人々にとって豊かな地域をつくることになるのではないだろうか。今回の特集では、学校、地域、ＮＰＯが行う様々な活動を取り上げ、子どもと地域との関わりについて考える。

（特）福井県子どもＮＰＯセンター
理事長
岸　田　美枝子

子どもはそのまま未来です！

■始まりは、自分の子ども

子どもが好きだったワケでもなく、何か技術があったワケでもない。のに、結婚して子どもがきた。あれよあれよという間に、８年間で子どもは３人になった。夫は高度経済成長の真っ直中にあって、家族を食わせる使命を負って出て行き、帰宅して３人の寝顔と対面する日々。当時は永久就職とか三食昼寝つきの代名詞だった専業主婦になって、やることといったら家事と育児に忙殺の日々。が、変化は子どもの成長とともにやってきた。近所の公園で母親同士の情報交換、入園、入学と子どもの縁でつながる、つながる…。

「いっしょにハイキングに行こうよ」

「ちょっと美容院行きたいから預かって」

「絵本の読み聞かせがあるみたい」

「子どもといっしょにお芝居や音楽を楽しむ会もあるって」

「そうそう、生協にも加入したら？」

「うちの子、どうも算数が苦手らしいのよ、お宅はどうしてる？」

これが、私の今のはじまり。いつも自分の子どもといっしょだった。我が子の友だちとその親も、もれなくついてきて、住んでいた団地の路地は、子どもたちのざわめく空間だった…。1970〜80

特集 子どもと育ちあう地域
子どもはそのまま未来です！
特定非営利活動法人 福井県子どもＮＰＯセンター理事長　岸　田　美枝子 ・・・ ①
行きたくなる地域の中の学校づくり　スクールサポーター　森　田　進　軍 ・・・ ④
子どもと育ちあう地域　〜「天保義民」についての総合学習の実践をとおして〜
金沢市立西小学校教諭　松　村　一　成 ・・・ ⑧
子育て・教育・学校を語り合う拠点としての地域　金沢大学教育学部教授　山　本　敏　郎 ・・・ ⑫
コラム どうする？中心市街地
小松の中心市街地商店街の方向性について
（株）こまつ賑わいセンター商店街マネージャー　村　中　雅　彦 ・・・ ⑮
センタースタッフ紹介 ・・・

年代のことである。

子どもは、子どもの世界で笑ったり、泣いたり、悔しかったり、嬉しかったりして成長する。他の子どもが見えるから、自分の子どもの個性にも気づいたりして、大人もまた、子育てのストレスをゆるやかな大人のつながりの中で自然にやり過ごしていった。大人も子どもも地域で育ち合うという確信に近い子育て観を持ち始めたのが、今の活動のはじまりだった。

■ＮＰＯ業界デビュー

転機が訪れたのは、夫の転勤だった。新しい土地で３才の末っ子が幼稚園に入園し、上の二人は小学校。ここでも、子どもの縁でつながりをつくり「子ども劇場」の運営に関わるようになった。目的を共有する人々の集まり、ゼロから創造する活動、民主的な運営と経営にも責任を持つ仕組み、ＮＰＯという言葉すら知らなかった時代に、ＮＰＯの組織論は実践の中から会得したような気がする。が、子どもたちを取り巻く社会環境は悪化の一途をたどり、もはや報道されずに日常化した子どもの社会問題は不登校、いじめ、自殺、と枚挙にいとまがない。現実感のない殺人に子どもの心が見えない大人たちの右往左往が続いている。ひとりの市民として、子どもの社会的な課題に何かできないだろうか、大それた事を考え始めたとき、末っ子は18才で県外に脱出していた。何より、この地で子育てでつながったかけがえのない仲間がいて、ミッションを語り明かした。やがて、子育ては「卒業」、嫁は「廃業」、主婦は「時々営業、おおいに休業」の宣言をしてＮＰＯ業界の端っこに籍を置く。1999年のことだった。

■特定非営利活動法人福井県子どもＮＰＯセンター、箇条書き！

＊設立の経緯

1990年に福井県内10カ所の「子ども劇場」のネットワーク組織として福井県子ども劇場協議会が発足。1999年、協議会の活動を継承し、より発展的に公益活動を展開するために「福井県子どもＮＰＯセンター」に名称を改め、ＮＰＯ法人格を取得した。県内第１号!!

＊団体の目的

・子どもの文化権の確立と社会参画の機会の拡充
・県域で子どもと文化に関わる諸団体のサポート
・子どもの育つ地域環境づくり

＊事業内容

①子どもの育ちをサポートする事業

子どもがかける子ども専用電話「ふくいチャイルドライン」

遊びと創造表現のプレイリーダー養成と派遣事業

季刊情報誌「こどもＣｈａｎｎｅｌ」の発行

②子どもたちの直接体験事業

中・高校生の雑木林整備と森の遊び場づくり：「森の生命にＴＯＵＣＨ」

高校生の保育ボランティア養成：「10代のファミリーサポーター養成講座」

中・高校生の表現活動：演劇工房「うめだ塾」→社南ドラマＫＩＤＳ

中・高校生交流企画：青春18切符で行く日本発見の旅

③行政・他団体との協働事業

こどもワークショップ：男女共同参画、まちづくりなど

子育て支援ダイヤル「育ＴＥＬＹＯＵライン」：乳幼児をもつ家庭への支援

舞台芸術・映像作品紹介：行政・学校・他団体へ子どもと文化体験の企画サポート

子どもイベント企画提案：企業提携

■10代のファミリーサポーター養成講座から

「クラスで妊娠しちゃった子のカンパ箱が回ってきたんだよ」

「携帯の出会い系で知り合った友だちの彼がさ、

携帯変えちゃって、もうつながらないんだって」子どもＮＰＯセンターに来る高校生の会話。相変わらず「寝た子を起こすな」論が中心の学校での性教育に対して、高校生の性体験率は、３年生で男子30％、女子39％（全国高等学校ＰＴＡ連合会の調査）である。性を考えることは命を考えること、そして自分の事を自分で決める自己決定権をもつことだろう。子どもにかかわるＮＰＯとして性といのちの課題に向き合って事業化したのが高校生を対象にした「10代のファミリーサポーター養成講座」。助産院を訪問することから始まるこの講座は、言葉ではないホンモノだけが持つ力で参加した高校生を揺さぶり続けている。生まれたばかりの嬰児が居て、その出産をともに体験した父親の話に身じろぎもしない。ここでは、夫が陣痛のオクさんを後ろから抱きかかえて出産する。愛する夫の愛情を背中でいっぱいに感じ、いっしょに命の誕生を迎える。幼い兄弟姉妹、祖父母ももちろんいっしょ。新しい命は、家族の喜びの中で産声を上げるのだ。

「出産は医療行為ではなく、自然なもの。赤ちゃんは生まれたいときに自分の力で生まれてくる。命のねっこは、愛し合う家族が共有するところにあるのですよ」と柔和に微笑みながら話す助産師に、性教育という言葉などうすっぺらに聞こえてしまう。講座は、理論や実践・体験を交えて６ヶ月間に及ぶが、講座修了生が子どもＮＰＯセンターで保育ボランティアとして活動を始めている。やがて、彼らは男女共同参画や少子高齢化といった社会に関心をもつ「子ども市民」に成長していく。受験科目ではないので学校ではスミッコにいるこうした体験こそ、生活者としての視点と力になる。

この事業、３年前から福井県子ども家庭課と協働で実施されているが、少子化対策として未来の親への啓発にもなるからだ。子どもＮＰＯのミッションと行政の役割が協働することで相乗効果を生みだしているといえよう。

■思春期のこどもたち

福井県子どもＮＰＯセンターで実施している事業の中で、特に中・高校生の直接体験活動のコンセプトは、子どもたちの社会参画だ。事業にその分野の専門家を登場させることや子どもが自分の責任で自由に創造することも大切にしている。大人が考えている以上に、子どもたちは警戒心いっぱいで、失敗を恐れる。同世代の子ども同士でも表面上はそつなくお付き合いして、けっこうよそよそしい。自分の領域に入り込むことを拒んでいる、そんな隔たりを感じたりする。そんな彼らをひとりの人格として捉える「子ども観」に立ち、自分の未熟さも失敗もするありのままの大人として関わっている。社会の仕組みを思春期の子どもたちの視点で捉えることは、環境問題から命や性、職業や結婚観にまでおよぶ。それは、とりもなおさず子どもたちが自分を表現することであり、コミュニケーションによる人間同士の確かめ合いだ。子どもたちといっしょに創り会う大人の存在になれたら、子どもから信頼される他人の大人になれたら、子どもＮＰＯセンターに集う多くのボランタリーな人々の願いである。

■風と土の市民活動三昧

市民活動は私の中で現在進行形であるが、得るものは無限大。時には熱く、時には客観的にいくつかの視点をもっている。外からの刺激，新しい視点、よそものの目といった、いわば風からもらうこと。その土地ならではの伝統や風習、歴史の視点、これは土のにおい。そして、科学的な視点，評価，比較，数字を読むドライな目。あとは、惚れた，好きだの世界がもつ人間ならではの醍醐味だろうか。

微力が集まれば何でもできそうな気がして、「こどもたちの未来」に関わりたいと願っている。が、志を抱いて走り出したものの、やがて組織維持に埋没し、肝心のミッションが見えなくなる。事業そのものは手段のハズなのに目的化してしまう。

そんな日常にあって立ち止まり、振り替えることを肝に命じたい。ＮＰＯ法施行から７年、ＮＰＯ法人は量的な拡大に対して質的な選別と淘汰の時代に入ったといえよう。

スクールサポーター
森　田　進　軍

行きたくなる地域の中の学校づくり

■ プロフィールと活動内容

森田進軍（もりた・すすむ）

2003年まで小学校校務士（28年間校務士をつとめる。持病の悪化に伴い退職。）

2003年より金沢市立鞍月小学校スクールサポーター

2004年同校特別非常勤講師

校務士時代より、主に木工細工デザイナー小黒三郎氏(文末注を参照)のデザインに基づく木のおもちゃをつくり、学校・公民館・児童施設に寄付や貸し出しをする活動を続けている。また不登校になった子どもや障害をもった子どもたちへのかかわりをきっかけに、子どもたちのために組み木づくりや農業体験を実践してきた。現在、木のおもちゃを製作・寄付する活動を続けながら、小学校にて木工のスクールサポーター（図工授業）、カルチャーサポーター（課外活動）をつとめる。

■活動のきっかけ

木工おもちゃを創り始めたのは、宝塚在住の無二の親友から、阪神淡路大震災後に学校に行けなくなった不登校の子どもたちが大勢いること、こうした不登校の子どもたちのために教育総合センターの呼びかけで集まった若者たちによるボランティア・サークルがあることを、聞いたからだ。自分にも子どもたちのために何か力になれることはないかと考えた。たいした事は出来ないけれど何もしないより何かしたい。そのような思いで作ったバランストンボを宝塚の子どもたちに送ることにした。さらに、カブトムシの幼虫を育ててみないかと問いかけてみたところ、普段は自ら何かをしたいとは言わない子どもたちが初めて「育てたい」と応えてくれたとの連絡が入った。このとき子どもたちのために少しでも力になれるということが大いに励みになった。そのことが後の活動につながっている。

■ “農業”体験

その後、自分の勤務した小学校でも障害を持った子や不登校の子どもたちがいることを知った。なんとか子どもたちが行きたくなるような学校にしたい。まずは児童が登校する時に一番先に目に入る場所、玄関を花で迎えようと考えた。